

浄土真宗を開かれた親鸞聖人は、その教えを『顕浄土真実教行証文類(けんじょうどしんじつきょうぎょうしゅうもんるい)』などの多くの書物に著されました。それとともに何とか多くの人々に阿弥陀様のお慈悲を伝えたいと願われて、当時の今様とよばれた流行歌(はやりうた)の調べにのせて、たくさんの「和讃(わさん)」をおつくり下さいました。ですから、私たちが毎朝のお勤めとして唱えている「正信念仏偈」と「和讃」は、もったいなくも一日のはじめに親鸞さまのお説教をじかにお聞かせいただいているとも申せましょう。

ご和讃には『浄土和讃』『高僧和讃』『正像末和讃』の三種があり、『浄土和讃』と『高僧和讃』は聖人七十六歳の時にご制作されましたが、残る『正像末和讃』は晩年の八十六歳のご制作です。ご制作の時期も違いますが、内容も全く異なります。前の二つのご和讃は、「正信念仏偈」に詠われている内容とほぼ重なります。つまり、南無阿弥陀仏の念仏となつた阿弥陀如来の本願が、七人の高僧の教えを通して貴方や私にまで届いていますよと、何とかみんなに伝えたいという思いから、かな歌で内容を広げてお作りになられたようです。

しかし『正像末和讃』は、その誰もが浄土に往生できるはずのみ教えを受け取るができない人間の愚かさや傲慢さに対する、悲しみと怒りに満ちた内容なのです。

特に、最初のご和讃 「弥陀の本願信ずべし 本願信ずるひとはみな 撰取不捨の利益にて 無上覚をばささるなり」 には次のような添え書きがおかれています。

「康元二歳丁巳二月九日夜寅時(こうげんにさいひのとのみにがつここぬかのよとらのとき)夢に告げていはく」と。康元二歳とは一二五七年のこと、二月九日とはそのちようど五十年前のこの日、念仏弾圧によつて親鸞さまの兄弟弟子であつた住蓮房と安楽坊が処刑された日なのです。

これを知ったときは身が震えました。この後につづく百十六首のご和讃を拝読する姿勢が変わつたことはいふまでもありません。私たちは、単に阿弥陀様のお慈悲をありがたく喜ぶだけでよいのでしょうか。

親鸞さまの教えの背後にある歴史と願いを頂戴するように、心してお聴聞いたしましよ。

「南無阿弥陀仏」

